

タイトル	フリードリヒ・シラー『ドン・カルロス スペインの 皇太子 演劇的詩』 一八〇五年最終版 第三幕
著者	北原, 寛子; KITAHARA, Hiroko
引用	北海学園大学学園論集(177): (1)-(28)
発行日	2018-11-26

フリードリヒ・シラー

『ドン・カルロス スペインの皇太子 演劇的詩』

一八〇五年最終版 第三幕

北 原 寛 子 訳

王の寝室

第一場

寝台脇の小机の上に、二本の火のついたろうそく。部屋の奥には、何人かの小姓たちが跪^{ひざまず}き、眠り込んでいる。王は、上着を半分脱いでおり、机の前に立ち、片腕について肘掛け椅子にもたれかかり、考え込んだままだいる。彼の前には、小さな肖像画付きの首飾りが一つと書類がある。

王 あれがかつて夢見る乙女であったことは——誰がそれを否定できよう？ 余はあれに愛を与えることがまったくで

きなかった、

だがしかし——あれに不足を感じさせるようなことをしただろうか？

だから明らかだ、あれが間違っている。

「ここで王は、我に返る動きをする。王はぎょつとして見上げる。」
どこにいたのだったか？

ここは余以外に起きている人間はいないのか？ しかしもう昼では？——余はまどろんでいるのだな。

自然よ、まどろみを喜んで受け取りなさい。王には

失われた夜を取り戻す時間などないのだ。

今余は起きているから、昼のようでなければならぬ。

「王はろうそくを消し、窓の覆い布を開ける。——王は行ったり来たりする間に、眠っている少年たちに気づき、しばらく黙ったまま、彼らの前に立つ。それから彼は呼び鈴を鳴らす。」 余の広間

で、ひょっとしてまだ眠っている者はいるか？

第二場

王。レルマ伯爵。

レルマ 「王に気がつき、慌てて」陛下、
お加減がすぐれませんか？

王 左の

吾妻屋が火事だ。警報を

聞いていないか？

レルマ いいえ、陛下。

王 聞いていない？ なぜ？ では余は夢に見ただけだったのか？
偶然ではそうはならないだろう。

館のあちら側では、

王妃が就寝しているのではないか？

レルマ はい、陛下。

王 夢にぞっとさせられた。

あそこは今後見張りを倍にしろ、

聞いているか？ 晩になったらすぐにな——しかし
極秘で行うのだ。——そんなことになるつもりは——

お前は余を、確かめるような目で見ているな？

レルマ お休みが必要そうな

ぎらぎらとした目が見えます。

陛下、恐れながら申し上げます、

大切なお命を思い起こしてください、

民衆を思い起こしてください、彼らは

徹夜の形跡を、敬つてよそよそしく距離をとつても

そのようなお顔に読み取るやもしれません——たった

二時間の睡眠では——

王 「ぎろりとにらみ」 睡眠だと？

睡眠はエスクリアル墓所でたつぷりできるわ。——

王が眠る限り、王は王位の事を考え、

男は、自分の妻の胸のうちを——いや！ いや！

それは名誉毀損だ。——あれは女ではなかったか、

余に囁きかけたのは女だったのか？

その女の名は、誹謗だ。犯罪行為が

確かめられた訳ではない、そのことをある男が、余に明白に示す

までは。

「この間に目を覚ましていた小姓たちに向かつて」

アルバ公爵を呼んでこい。

「小姓たちは行く」 伯爵、こちらへ！

本当なのか？

「王は伯爵の前に立って、探るようになっている」

ああ、何もかも知るには、

たった心臓一拍の間しかいららないだろう。——それが本当と誓え

るか？

余は騙されているのか？ なあ、本当か？

レルマ

我が偉大なる

最高の王様。――

王 「身を離して」 王様！ 王様！

王様って！――虚ろな繰り返し以外に

もつといい答えはないのか？ この岩に

ぶつかって、飛沫を、飛沫を

余の燃えたぎる熱にかけてやりたい――あいつは

余に燃える黄金を与えよる。

レルマ

何が本当だと言うのでしょうか、陛下？

王

何でもない、何でもない。ほつといてくれ。行ってよい。

「伯爵は行こうとする。王は彼をもう一度呼び戻す。」

お前は結婚しているのか？

子どもはいるのか？

レルマ

はい、陛下。

王 既婚で、お前の主人のもとで、一晚

警護にあたることが出来るというのか？ お前の髪は

銀色になっているが、お前の妻の誠実さを信じて

赤面したりはしないのか？

さあ家に帰れ。ちようどお前の妻が

お前の息子の血を汚す抱擁をしているところに出くわすぞ。

お前の王を信じるのだ、行け――お前はびっくりして立っている

のか？

思わしげに余をじろじろ見ておるな？――余も

髪がいくらか灰色だからか？

不幸な者よ、よく考えてもみる。王妃たちは

自分の誠実さを汚したりはしない。もしお前が

疑うなら、死んだも同然だ――

レルマ 「熱を込めて」

誰がそう出来ましょう？

我が王様の全州におきまして、誰が

悪意に満ちた疑いで、

天使のごとく清らかな誠実さを貶すほど

生意気でありましょうか？

最高の王妃様をそんなにも深く――

王

最高の王妃だと？

そして、お前の最高の王妃でもあると？ あれは

余の側で、とても温かな喜びを感じていると思っていた。

これはあれにとつて、多くに値したはずだ――

あれが与えることができたのは、余が知っているよりもっと多

いはず。

お前の勤務を終わりにしよう。公爵に来させなさい。

レルマ すでに控えの間に待機しております。

王 「穏やかな調子で」

伯爵！――お前が

さっき聞いたことは、きつと本当だ。

余の頭は、徹夜で興奮している。――忘れてくれ、

余が目覚めた夢で話したことは。わかったか？

忘れるんだ。余は、お前の慈悲深き王だぞ。

「王は伯爵に口づけのために手を差し出す。レルマは歩いて行って、アルバ公爵のために扉を開ける。」

第三場

王とアルバ公爵。

アルバ 「事情がよくわからないという表情をして、王に近寄る」

こんな不意のご命令とは——
こんな尋常ではない時間に？

「王をじっくり観察するために、ずかずか入る」

しかも、このご様子——

王 「座っていて、机の上の肖像画付き首飾りを握っている。彼は公爵をしばらく無言で見つめる。」

では、本当なのか？

余には誠実な家臣がいないのか？

アルバ 「じつと狼狽して立っている」 何ですって？

王 余は死ぬほど、侮辱を受けた——みんなが知っていて、余に警告した者は、いなかった！

アルバ 「驚きの眼差しで」

侮辱とは、
我が王様に関わることで、私の目に入らなかったものですか？

王 「彼に手紙を示し」

お前はこの筆跡を知っているか？

アルバ これは

ドン・カルロス様のお手。——

王 「沈黙、その間公爵を厳しい目で見つめる」

まだ何も察しがつかないのか？

お前は、あいつの名譽欲を余に警告したな？

あいつの名譽欲だけだったのか、

余が用心しなくてはいけなかったのは、これだけか？

アルバ 名譽欲とは、とても大きな——

幅の広い言葉でして、その中には、無限に多くが含まれます。

王 で、お前は余に打ち明けることは

特にないのか？

アルバ 「いくらか黙った後、打ち解けない表情で」

陛下は

私の警戒心に対して、この国をお任せくださっています。

この国には、私は秘密の事柄を知ったり、

洞察したりする機会を与えられています。私がその他に推測したり、考えたり、知っていることは、

私個人のものです。これは

家来が、地上の王たちに対して

取っておくことができるように、

売られた奴隷が優先権を持つ聖なる所有です——私の魂の前で明白なことをすべてが、

我が王様のためになるほど熟しているわけではありません。

満足なさりたいならば、主人としては

お尋ねにならないでください。

王 「彼に手紙を渡して」

読め。

アルバ 「読み、驚いて王に向き直る」

誰なんですか、

この不幸な手紙を、我が王様の

手に渡した狂った奴は？

王 何だと？

ではお前は、皇太子が誰のことを言っているか、知っているのか？

——名前は

余が知る限り、手紙では伏せられている。

アルバ 「うろたえて、後ろに下がり」

先を急ぎ過ぎてしまいました。

王 お前は知っているのだな？

アルバ 「しばらく考え込み、」 ことは明るみになった。

ご主人様がお命じだ——私はもう引くことは許されな——
し定いたしません。——私はこの人物を知っています。

王 「ぞっとするような動き方で立ち上がり、」

ああ、新たな死を、我に考え出させ給え、

恐ろしき復讐の神よ！——これだけ明らかで、

これだけ世に知れ渡っていて、これだけ声高に合意されているのなら、

詮索する手間を省いて、

すでに一目で見破られていたのだな——これで

十分すぎる！ 余は知らなかった！ これは知らなかった！

ということは、余が一番後なのだ！

我が国中で最後の者——

アルバ 「王の足元に踞き」 はい、

私のせいでございます、陛下。

臆病な知ったかぶりを恥じております。そのせいで

私は、我が王様の名誉や

正義、真実を声高に語ることができなくなり、

口を噤んでおりました——しかしすべてが

沈黙を欲しておりますが——男たちの美德に

魅了されて、舌を閉じておりましたが、

あえてお話しさせていただきます、私が存じておりますのは、

とある息子が取り入ろうとして誓いを立てたこと、

つまり、誘惑的な魅力が、

奥方様の涙を——

王 「間髪を入れずに、」 立て。

王の言葉だ——立て。

びくびくせずに話せ。

アルバ 「立ち上がって」 陛下は

おそろくまだ、

アランフェスの庭の出来事をよく覚えていらっしやいますね。

陛下は、王妃様が侍女全員を

所払いして——絶望した目をして——お一人で——

今は使われていない東屋におられるところをご覧になりました。

王
は！

何を聞くことになるのか？ 続けろ！

アルバ
モンデカー侯爵夫人が

国外追放になりました、

なぜなら、素早く王妃のために

我が身を犠牲にできたからです——今

報告されているのは、侯爵夫人は

命令されたことをしたまでということですよ。

皇子様があそこにおられました。

王
「ひどく怒り出し」 あそこにいたと？

しかし、ということとは——

アルバ
男の形跡が砂にあり、

それは東屋の左の入り口から

洞窟に向かい消えていました、そこにはまだ

皇子様がお失くしになったハンカチが落ちていて、

すぐに疑いが生じました。庭師が

皇子様にそこで出くわしており、それは

ほぼ数分前と計算され、

それはちょうど、陛下が

東屋に姿をお見せになった時でした。

王
「深い黙考から返りつつ」

そしてあれは泣いていた、

余が意外に思ってた目にした時には！ あれは

全宮廷の前で、余を赤面させた！

自分自身に対しても赤面させた——神にかけて！ 余は

裁判官のように、あれの誠実さの前に立つぞ——

「長く深い沈黙。王は腰を下ろし、顔を覆う。」

そうだ、アルバ公爵——お前の言う通りだな——これは

いくらか恐ろしいことになりそうだ——

しばらく一人にしてくれ。

アルバ
王様、

まだすべて決まったわけでは——

王
「紙に手を伸ばし、」 これでも違うのか？

そしてこれは？ またこれは？ 忌々しい証拠の

この明らかな一致は？

ああ、火を見るよりも明らかだ——余が

長らく知っていたことは——冒涇が

その時始まっていたということだ、余がお前の手から

あれをマドリッドで初めて受け取ったあの時に——なおも見える

ぞ、

この恐ろしい眺めでは、幽霊のように青白く

余の白髪の上で、あれがしおれていく様が。

あの時始まっていたのだ、誤った戯れが！

アルバ

皇子様にとっては

許嫁が死んで、若い母親へと生まれ変わったのです。

すでに二人は、願望を込めて

燃えるような感情に身を委ねていたのですが、

それはお妃様にとって、新しい身分が禁じることでした。恐れはとうに克服されていましたが、さらに最初の告白につきまとう懸念が起こり、

許された思い出の懐かしいイメージの中で、

大胆な言葉が誘惑となったのです。

考え方や年齢が調和したことで兄妹のようになり、

同じ欲求に突き動かされて、お二人は

溢れる情熱に大胆にも身を任せたのです。

政治は、お二人の思いに先回りしたのです。

陛下、お妃様が

枢密院に対してこの全権を委ねたと、考えられましょうか？

「お妃様が色恋を克服することを、

内閣の選択が注意深く検討したのでしょうか？

お妃様は、恋するおつもりでいたところで、受け取ったのは――

王冠でした。

王 「傷つき、苦々しく」

お前の判断は、とても――

とても賢明だ、公爵――お前の雄弁さには

驚かされる。礼を言うぞ。

「立ち上がり、冷たく、威厳を込めて。」

お前の言う通りだ。

王妃は大失敗をしたのだ、余に

こんな内容の手紙を隠しきれなかったのだ――余に

庭で皇太子が、規則違反で

姿を現したことを秘密にできなかったのだ。あれは

誤った大胆さから、大失敗をしたのだ。余は

あれの罰し方を心得ている。「王は呼び鈴を鳴らす」

誰か他に

控えの間にいるか？――アルバ公爵には

用はない。下がれ。

アルバ

私は

夢中になってしまい、陛下に

二回目もお氣に召しませんでしたでしょうか？

王 「入ってきた小姓に」ドミンゴに

来させろ。

「小姓は退場する。」余はお前に

二分だらだらと

余に、お前に危害を加えかねない

恐れを抱かせたことを許す。

「アルバは退場する。」

第四場

王。ドミンゴ。

王は落ち着くために、何度か行ったり来たりする。

ドミンゴ 「公爵の後数分後に登場し、しばらく厳かな静けさの中で考え込んでいた王に近寄る。」

陛下、何と喜ばしいことでしょう、

こんなにお静かに、落ち着いていらつしゃるとは。

王 お前は驚くのか――

ドミンゴ 慎重さとはありますが、私の危惧はとどのつまり根拠がなかったのですね！ さて私は、ますます希望が持てます。

王 お前の危惧だと？

何が気がかりだったというのか？

ドミンゴ 陛下、

私は隠すことは許されないのでしよう、すでに

秘密を存じ上げております――

王 「陰鬱に」 余は

お前とこのことを共有したいと望みを表明したか？

資格もないのに、余に先回りするのは誰だ？

余の榮譽に対して、随分図々しい！

ドミンゴ 王様、

私がこれを聞いた場所や状況や、

このお話をされた方の身分が

少なくとも、そのような科から私に罪はないと申しております。

告解場にいることは、私には馴染み深いものです。――

それを明かした女性の繊細な良心が負った罪業よりも、

馴染み深いです。この方は天の慈悲をお求めでした。

公女様は、

王妃様にとって恐ろしい結果を予感させる原因となった行いを後

悔していました。

王 本当か？

優しい心持ちだ――お前の推測は正しい、

だからお前は呼ばれたのだ。お前は、

見通しのきかない妬みが余を投げ込んだ

この暗い迷路から、余を導き出さねばならないぞ。

お前からは真実を期待している。心を開いて

話さない。余は何を信じるべきか、どんな決心をすべきか？

お前の立場上、余は真実を求める。

ドミンゴ 陛下、

中立という私の立場が私に

手加減という甘い責務を負わせていなくても、

陛下にお誓いいたします、

陛下の平安のためにお誓いいたします、

秘密が明らかにされても冷静でありますことを——
秘密を詮索することを永遠に諦めます、

これは決して、喜んで進展してはいけないのです。
今知られていることは、許されるものです。

王様のお言葉は——そして王妃様は

失敗などしておりません。陛下の御意志は

幸せと同様、誠実さをお授けになります——ただ

王様がいつも同じようにお静かになさることだけが
中傷から起こる

噂を強力に打ち消すことができます。

王 噂だと？

余のことを、我が国民たちの間でだと？

ドミンゴ 風評です！

忌まわしい風評なのです！ 誓ってそう申します。

しかししたしかに、

民の信じることが、まだ証明されていないとしても、

真実同様に重要になることがあります。

王 なんとということだ！

これがちょうどそれにあたるとでも——

ドミンゴ 良い名前は

大切なものです。王妃様が——

市民の子女と

対抗しなければならない唯一のものです——

王 だからこそ、余は望むのだ、

ここで怯えている場合ではないだろう？

「王は自信がないような目でドミンゴを見つめる。しばらくの沈黙の後。」

司祭よ、

余はもつと悪いことをお前から聞くはずだ。

じらせるな。もうずっと

この不幸をもたらす顔に、そう読み取っているぞ。

言ってしまう！ なるようにするのだ！ もう

拷問台の上で余を震えさせるな。

国民は何と思っているのだ？

ドミンゴ もう一度申します、陛下、国民は

思い違いをします——しているのです。彼らが

主張することが、王様を動揺させてはなりません——

ただ——彼らがこれまで

そういったことを厚かましく言いたてて許されたことを——

王 何だと？ 余は

そろそろお前に毒を一滴頂戴しなければならぬのか？

ドミンゴ 国民たちは、一カ月遡って考えています、

陛下が

ご病気で、死にそうになりました——この後

三十週して、国民たちは運良く

回復されたと知りました——

「王は立ち上がり、呼び鈴を鳴らす。アルバ公爵が入ってくる。ドミンゴと出くわす。」

私は驚いております。

王 「アルバ公爵に向かって歩き、」

トレドよ！

お前は男だ。余をこの僧侶から守ってくれ。

ドミンゴ 「彼とアルバ公爵は当惑して見つめ合う。しばらくの間。」

もし私たちが、この知らせを使者に

それとなく伝えておくべきだったと

前もって知ることができたとしたら――

王 お前たちは、私生児だというのか？

お前たちは、あれが自分が孕んだと感じた時に、

余は、死から復活したも同然と言ったな？――どういふことだ？

それはあの時、余が思い違いをしているのでなければ、

お前たちは、聖ドミニコを

すべての教会で、余の身に起こった

とてつもない奇跡で賞賛したのだったな？――あの時

奇跡だったものは、今はもうそうではないのか？

ということとは、あの時、あるいは今も余を欺いたのだ。

何を根拠にして、お前たちは余が信じるべきだと主張するのか？

ああ、余はお前たちを見通しているぞ。陰謀が

あの時十分熟していたとしたら――そしたら、

それは、その名声にかけて、神聖な陰謀だった。

アルバ

陰謀！

王

お前たちは

例がないほど一致して

今、まったく同じ意見を偶然出したに違いない、

でも了解はしていないのだろうか？ お前たちは、余に

そうするように説き伏せたいのだろうか？ 余はひょっとして

どんなにかお前たちが、盗みを働きたいと熱望しているか

気がついていなかったのかもしれない？

お前たちは、余の苦しみ、

余の滾る怒りを、どれだけ楽しんだのかなどな？

公爵は、余の息子に与えられるべき

好意を得ることに熱心だな？

こちらの信心深い方は、自分のちょっとした恨みを

余の怒りという巨人の腕で喜々として増幅させたな？

お前たちは、余を

思うがままに引くことのできる弓だと思っているのか？――

まだ余にも意思があるぞ――もし

疑いが起こったら、少なくとも

お前たちから疑うぞ。

アルバ

このようなご理解を

私たちの忠誠心は期待していませんでした。

王

忠誠心！

忠誠心とは、危機の迫った犯罪を警告するのであって、

それをしようとすることを、復讐心というのだ。

聞け！ 余は一体、お前たちの献身によって

何を得たのか？――お前たちの申し立てが本当なら、

余には、別離という傷以外に何が残るといふのだ？

復讐して悲しく勝つことか？——いや、そうではない、

お前たちがただ恐れているのは、余に

気まぐれな推測を抱かせることだ——地獄の淵に

お前たちは余を立たせ、そして逃げるのだ。

ドミンゴ

他の証拠も

可能ではないでしょうか、目では

見ることができないような？

王 「たつぷりと間を開け、真面目で厳かに、ドミンゴに向き直り、」

我が王国の

有力者たちを招集し、

自ら裁くことにしよう。皆の前に

進み出て——お前たちに勇気があれば——あれを

浮気女と訴え出よ！——あれは

死刑で死ぬのだ——容赦はしない——あれと

皇太子は死なねばならない——しかし——覚えておけ！

あれが自分の罪を贖うことができるなら——お前たちも自分です

るのだ！

お前たちは、そのような犠牲を払って、真実を貫くつもりか？

決心するのだ。そうしたくはないのか？ お前たちは黙っている

な！

アルバ 「黙って遠くに立っている、冷たく落ち着いて、」

そうしたいです。

王 「驚いて振り返る、公爵を長い間じっと見つめて、」 それは勇

ましい！ しかしそうなる

お前たちは、厳しい戦いの中で、自分たちの命を

はるかに価値のない何かに掛けたことになるな——

賭博者の軽薄さで

名声という馬鹿げたものに掛けたのだ——お前たちにとって

命とは何だ？——余は王家の血を

狂った者の報酬に与えはしない、取るに足らない存在を

背伸びして諦める以外に

何も望めない者などに——お前たちの犠牲など

捨ててくれるわ。——行け、謁見の間で

余の次の命令を待つように。

「二人は退場する。」

第五場

王一人。

今、私に、人間を一人お授けください、よき慎重なる方——

あなたは私に、多くを授けてくれました。今度は

人間を一人お贈りください。あなたは——あなたは孤独です、

それはあなたの目が隠されたものを精査するからです。

私に友人をお授けください、というのも私は

あなたのように全能ではないからです。あなたが

私にくださった協力者たち、彼らが

私にどうしたかはご存知ですね。彼らが手にした分だけ

彼らは私に価値がありました。彼らの飼いなされた悪徳は

馬具で制御されており、あなたの天候が世界を浄化するように、

私の目的のために働きました。

私には真実が必要です——真実の静かな泉は、

過ちという暗い瓦礫の中で掘り返されており

王たちの運命ではありません。私に

純粹で、素直な心を持ち

明るい精神と捕らわれのない目をした類まれな男を、

私が妻を救う道を一緒に探せる男を与えてください。——

ロープのたるみを引き締めるとしよう、

統治者に日輪の周りにざわめく、何千人ものうちで

たった一人を見つけ出させて下さい。

「王は小箱を開け、台帳を取り出す。しばらくそれをめくった後」

ただの名前だ——

名前だけが並んでいて、一度も

彼らがこの帳面のこの場所に載せてもらえることになった

功労には、言及がないな——感謝よりも

忘れやすいものは、何だろうか？ しかし、こちらのページは、

家門の消滅が、その都度書き添えられているな。どうということ

だ？

これはよくない。この復讐の記憶などが、

まだ役に立つのだろうか？

「さらに読む。」

エグモント伯爵¹？

こいつは、ここで何をするつもりだ？——サン・カンタンの勝利
は

とうに色あせている。こいつを死者の中に入れよう。

「王はこの名前を消し、他の頁に書き加える。さらに読み続けてか
ら。」

マルキ・フォン・ポーザ
ポーザ伯爵？——ポーザ？——ポーザ？ 余は

この人物のことをほとんど考慮していなかった！

しかも二回下線を引いている——大きな目的に

この男を定めていた証拠だ！

それにあてただろうか？ この人物は

今まで、余がいるところから遠ざかっていた。彼の目は

王位のある債権者を避けていたのだろうか？

神にかけて！ わが国土全領域において、

余を必要としない唯一の人間だ！

もしこの人物に、所有欲や名誉欲があったとしたら、

とうに我が王座の前に姿を現していたことだろう。

この変わり者をあえて使ってみようか？ 余がいなくとも

構わない人間は、余にとつての真実を持ちうる。

「王は退場する。」

¹ エグモント伯爵は、対フランスのサン・カンタンの戦いでスペイン軍の騎
兵隊を率いて功績をあげたが、その後オランダ独立抗争においてオラニエ公
爵の側につきオランダ独立を支持したことから、フィリップ王によって斬首
刑に処せられた。

第六場

謁見の間

ドン・カルロスはパロマ公子と話し込んでゐる。アルバ、フェリア、メディナ・シドニアら三公爵。レルマ伯爵やその他の重臣が、手に書類を持っている。全員が、王を待っている。

メディナ・シドニア 「周囲に立つ全員から、明らかに避けられてゐる。一人で考え事をしながら行ったり来たりしていたアルバ公爵に向き直り、」

あなたは、ご主人様とお話したのですよね、公爵――

ご機嫌はいかがでしたか？

アルバ 非常にお怒りでした、

あなたとあなたの知らせには。

メディナ・シドニア イギリスの大砲の火の中のほうが

容易でした、

この街の道の上よりも。

「カルロスは、静かに同情をこめて彼を眺めていたが、ようやく近寄り、握手を交わす。」

寛容なお涙に

心より感謝いたします、皇子様。

ご覧下さい、みんなが私を避けています。もう私の没落は決まったのですね。

カルロス 最高のことを

期待してください、友よ。私の父上のお慈悲とあなたの無罪については。

メディナ・シドニア 私はあの方の船団を一つ失いました、² どうして船団はまだ海に現れなかったのでしょうか――こんなような頭が

沈没した七十隻のガレー船に対して

何だというのでしょうか？――しかし皇子様――

五人の息子たち、あなたのように前途があつて――これが

私の胸を砕くのです――

第七場

王が着衣を整えて登場する。先ほどの登場人物たち。皆は脱帽し、両側に寄り、王の周りに半円を描く。沈黙。

² 一五八八年にスペインの誇る海軍（いわゆる「無敵艦隊」）が、ドーバー海峡でイギリス艦隊に大敗し、その帰途悪天候によって大きな損害を受けたことを指している。海上の覇権がスペインからイギリスに移った歴史的な大事件である。

王 「周囲をさっと見回し、」

帽子を被りなさい！

「ドン・カルロスとバルマ公子が最初に近寄り、王の手に口づけをする。王は、息子には気が付きたくない様子で、後者にいくらか親し気に向き直る。」

甥よ、お前の母親は

お前に皆が、マドリードでどれくらい満足しているか、知リたがつているぞ。

バルマ

母上は、私が初めての戦いの結果を出すまでは尋ねるべきではありません。

王 満足するといひ。もしこれらの大木が折れたら、

いつかお前の番が来る。

「フェリア公爵に。」

お前は何を持ってきたのか？

フェリア 「王の前で、片膝を曲げて、」

騎士団の長官

フォン・カラトラヴァが今朝亡くなりました。

ここに彼の騎士十字章をお返しします。

王 「勲章を取り、円をぐるりと見渡して、」

誰が、彼の後に

一番威厳をもってこれを着けることができるだろうか？

「彼はアルバに合図をする。彼は王の前で片膝をつく。王は彼に勲章を掛ける。」

公爵、

お前は余の第一の將軍だ——決して二度としないように、そうすれば、お前にも、余の慈悲が無くなることはないだろう。

「王はメディナ・シドニア公爵に気が付く。」

そこを見ろ！ 余の海軍提督だ！

メディナ・シドニア 「よろめきながら近寄り、王の前で跪き、首を垂れる、」

これだけが、偉大な王様、

私がスペインの若者と

無敵艦隊から持ち帰ったすべてです。

王 「長く沈黙した後、」

神様が

上におられる——余は人間と戦うためであって、

嵐や岩礁と闘うために彼らを送り出したのではない——

マドリードによく帰ってきた。

「王は彼に、口づけのために手を差し出す。」お前が

余の忠実な家臣であり続けていたことに

礼を言うぞ！——我が重臣たちよ、

もし余がこの男を評価したければ、この男は評価されるのだ。

「王は彼に立ち上がり、帽子を被るように合図する——そして再び

他の者たちの方を向く。」

まだ何かあるか？

「ドン・カルロスとバルマ公子に向かって」

お前たちにも感謝しよう。

「彼らは退場する。そのほかの重臣たちが近寄り、王に跪きながら

書類を渡す。彼はそれらにさっと目を通し、アルバ公爵に手渡す。」

これを官房の机の前に置いておきなさい——これで終わりか？
「誰も答えない。」

我が重臣たちの間に、

ポーク・伯爵が姿を現わしていないのはどういうことだ？ この

ポーク・伯爵は、余に立派に仕えたとわかっている。

もう生きてはいないのか？

なぜ彼は姿を見せない？

レルマ

その騎士は、

ようやく旅から戻ったところです。

彼はヨーロッパ中を周ってきました。

今はちょうどマドリッドにおり、

陛下の足元に跪きご挨拶する公式の日を待ち望んでいます。

アルバ マルキ・フォン・ポーク？——その通りです！

あの向こう見ずなマルタ騎士です、陛下、彼については

情熱的な行動が噂されています。

スレイマンが島を包囲し、

騎士団長が騎士たちに島へ来るように招集した時に、

突然アンカラの大学から

この十八歳の若者が姿を消しました。呼ばれもしないのに、

この男は、バレッタの都の前にいたのです。「僕のために

十字架を買ってくれたので」、この男は申しました、

「それにふさわしくありたいと思って」と。

彼は、ピアリーやクルチ・アリ、ムスタファやハサンに対抗して

聖エラスムスの城砦を、昼間に三度突撃が繰り返されるなか、守りとおしたあの四十人の騎士たちの一人でした。

とうとう城砦がよじ登られ、彼のまわりの騎士たちが

落とされた時に、あの男は自ら海に飛び込み、

一人、バレッタの近くで人々に迎え入れられたのでした。

それから二か月して敵は島を去り、

そしてこの騎士は、とりかかった学問を

終わらせるために戻ってきたのです。

フェリア そしてこのマルキ・ポークは、

その後カタロニアでのいかがわしい陰謀を

見つけ出したその人でもあり、

その能力の高さゆえに、王冠にとって

もっとも重要な州を受け取ったのです。

王

余は

驚いている——これはどんな人間なのだ、これを、

行ったのは、そして余が尋ねた三人のうちで、

一つも妬みを持たないとは？——確かに！

この人間は並外れた

性格をそなえているか、さもなくば性格というものがないか——

なんだか知らないが、

余はこの男と話をしなければならぬ。

「アルバ公爵に向かって」ミサを聞いた後で、

あの男を官房に連れてきなさい。

「公爵は退場する。王はフェリアを呼ぶ。」

そしてお前は

枢密会議で余の代役をせよ。

「王、退場する。」

フェリア 君主様は今日とてもお恵み深かった。

メディア・シドニア こう言ってくださいよ、

あの方は神だ！と——あの方は私にはそうでした。

フェリア あなたはとても運がいい！ 私は

きわめて心温まる分け前に与りました、提督。

その他の高官

私もです。

第二の高官

私も本当に同様です。

第三の高官

私の心は打たれました。

なんと功績をあげた將軍でしょうか！

第一の高官

王様は

あなたにお恵み深かったわけではありません——公正なだけです。

レルマ 「退場しながらメディア・シドニアにむかって、」

たった二言で、あなたは突然なんと豊かになったことか！

「全員退場。」

第八場

王の官房

マルキ・フォン・ポーザとアルバ公爵。

マルキ 「登場しながら」

私をあの方がお呼びと？ 私を？——それはありえない。

名前を取り違えていますよ——それに

あの方は私に一体何をお望みなのでしょうか？

アルバ

あなたと知り合いたいのです。

マルキ ただの好奇心のせいでしょう——ああそうしたら、

時間をもったいない——人生は

驚くほど早く過ぎるものです。

アルバ

私はあなたを

あなたの幸運な星に委ねます。王様は

あなたの手中にあります。できる限り

この瞬間にお役立てなさい、そして

しっかりと自分のものにしてしまいなさい、無くなつて

しまいますよ。

「退場する。」

第九場

マルキ一人。

よく言ってくれたよ、公爵。役立て

なくてはならないのだ、瞬間を、一度きり

差し出されたのなら。たしかに、あの廷臣は

よい教訓をくれた——あの人の意図では

よくないにしても、こちらの方ではそうだ。

「何度か行きつ戻りつした後」

でも私はどうやってここに來たのやら？——

自分の姿がこの鏡の中に見えているということが、

ただの偶然の強情にすぎないのだろうか？

百万人の中からまさに自分が、

つまりこの最も不確かな者が捉えられ、

王様の記憶に呼び覚まされたとは？

ただの偶然か？ ひょっとしてまたもつと多くのもの——

彫刻家の手にかかって荒削りの石が

生命を得るのは、偶然以外の何だというのだ？

偶然を与えるのは摂理だ——目的を叶えるために

人間は偶然を造成しなくてはならない——王様が

この自分とお望みかもしれないことと、同じぐらい多く！

——わかるのは——王様とご一緒でなくてはならなくても、

——真実がただ火の粉だとしても、

独裁者の心の中に、思い切って投げ込むものことだ——

慎重にやれば、この手はなんと実り豊かなことだろう！

だからひょっとして、最初は気まぐれに思えたことは、

とても役に立つもので、

とても思慮深いことかもしれない。有りか無しか——

どちらも沢山だ！ こう思って行動することになろう。

「彼は部屋を通り抜けようとするが、ある絵画の前でじっくり眺め

ようと足を止める。王が命令を出していた隣接する部屋に現れ

る。それから王は入ってきて、扉のところにじっと立っている。

マルキをしばらく気づかれることなく見つめている。」

第十場

王とマルキ・フォン・ポーズ。

マルキは王に気が付くとすぐに向かい合い、片膝をつき、立ち上がる。動揺の素振りを見せずに立ったままにいる。

王 「彼を驚きの目でじっと見つめ、」

余とすでに話したことがあったか？

マルキ

いいえ。

王

お前は

余の王冠に貢献している。なぜ

余の感謝を避けるのか？ 思い起こせば

たくさん人間が押かけて来る。

全能なのは、ただ神様お一人だけだ。お前は

王の目を探し求めてしかるべきであつた。

なぜお前はそうしなかったのか？

マルキ

私が

王国に戻って二日です。

王

余は

我が家臣を責めるつもりはない——許しを

乞いなさい。

マルキ

私は法を享受しております。

王

権利は人殺しにもある。

マルキ

良き市民はどんなにか

たくさんいるでしょうか！——陛下、私は満足しています。

王 「自分自身に向かつて」

何という自信、いさましい勇気だ、神にかけて！

しかしこれが望んでいたものだ——余は

このスペイン人を誇りに思いたい。悩まされたいものだ、

杯があふれたとしても——お前は

余への任務から外れたと聞いているが？

マルキ

よりふさわしい人のために

ポストを空けるために、私は引き下がりました。

王 それは残念だ。もしそのような頭脳の持ち主が休みだとすると、

我が国家にとつてどれほどの損害だろうか——おそらく

お前が懸念しているのは、お前の精神にふさわしい

分野がないことだろう。

マルキ

ああ違います！

私は、経験のある識者は、

人間の心の内や、その実質において訓練をつんでいると確信しています。

一目で読み取ってしまうのです、

私がその人にとつて、有用なことも、そうでないことも。私は

謙虚に感謝を込めて、お恵みを感じております、

それは国王陛下がこの誇り高いお考えを述べられることで、

私の上に積み重なっています。

しかし——

「彼は考え込む。」

王 考え込んでいるのか？

マルキ

私は——私は

正直に申し上げなくてはなりません、陛下——

私がこの世の市民として考えていたことを

あなたの家臣の言葉に衣替えする準備が、

すぐにはできていなかったのだと。——

というのも、陛下、私がずっと王冠との関係を留保していた時は

王冠に対してこの方針について理由を届け出る
必然性からも解放されたものと
思っていました。

王 その程度の理由でしかないのか？ 大それたことをすると
危惧していなかったのか？

マルキ もし私が、そのような尽力をする

時間を得ていたとしたら、陛下——私の人生はせいぜいその程度
です。

しかし私は、真実を危険にさらしているのです、もしあなたがた
私にこうしたお許しを拒むとするならば。あなたの

ご不興と軽視の中間に、私の

選択が残されていました——もし決断しなければならぬなら、
私はあなたの眼前を、愚か者としてよりも

むしろ罪人として行きたいです。

王 「期待に満ちた表情で」 それで？

マルキ ——私は王侯の従者でいることができません。

「王は彼を驚いてじっと見つめる。」

私は

商人を欺くのは嫌です、陛下。——もしあなたが
私を家臣にするに値するならば、

ただ立派な行いのみをお望みください。

戦場では、ただ私の腕、私の勇気を求め、

助言については、ただ私の頭脳をお求めください。

みんなが王に認める賞賛や、私の振る舞いは、

私の行為の目的であってはならないのです。

しかし私にとつては、忠誠はそれ自体意味のあることです。
君主が私の手でもって植える幸運を、

私は自ら創り出すことでしよう。

何を私の義務であるべきか自分で選べるならば、
とても嬉しく思います。

ご同意いただけますか？ あなたは

ご自分の世界に、他の創造主を許容できますか？

しかし私は、芸術家としてやっていけそうなところでも
彫刻のための鑿^{のみ}に身をやつさなければならぬのでしょうか？

——私は

人間らしさを愛しています。そして君主制においては、
私は自分以外の誰も愛してはならないのです。

王 この炎は

褒めたものだ。お前は善良さをもたらしたいのだ。

お前がそれをどのようにもたらすかは、愛国者にとつても、
賢者にとつても、等しく多くを意味するだろう。我が王国で

職責を選び出すがよい、

この高貴な衝動を十分に満たすだけ

ふさわしいものをな。

マルキ みつけられません。

王 なんだと？

マルキ 陛下が、私の手を通して広められたいものは、

——人間の幸福ですか？ ——それは

私の純粹な愛が人間たちに与えたいと思っているのと

まったく同じ幸福ですか?——この幸福のために

王権が喜びで震えているというのでしょうか——いいえ!

新しい幸福を王政政治は作り上げました——その幸せとは、

政治が分配するほどたっぷりあり、

人間の心には、

この幸福のために沈静化してしまう新しい衝動を生むのです。

政治の貨幣に、政治は真実を刻ませます、

それは政治が受け入れ可能な程度の真実、なのです。

これと似ていないすべての刻印は非難されています。

しかし王冠に対して役に立ち得るものは——それは

私にも充分でしょうか? 私の兄弟愛は

規模縮小のために私の兄弟を掛け売りしてもいいのでしょうか?

私は兄弟が幸せだとわかっているのでしょうか

——兄弟が思考を許される前だということに?

あなたが私たちに刻印する至福を撒き散らすために、

陛下、私を選ばないでください。私は

この刻印を公布することを拒まなければなりません。——

私は王侯の従僕でいることはできません。

王 「いくらか早急に、」

プロテスタント³だな。

マルキ 「少し考え込んでから、」

私の信仰でもあります。

「しばらくの間ののち。」

お前は

あなたの信仰は、陛下、

私は誤解されています。

これは、私が恐れていたことでした。あなたは

王権の秘密について

私の手でヴェールが取り去られるところをご覧になるでしょう。

私を驚愕させなくなったことが

私にとってまだ神聖と呼び得ることを、誰があなたに保証するの

です?

私は危険です、なぜなら、自分自身のことを考えたからです。——

私はプロテスタントではないです、王様。私の望みは、

ここで朽ち果てています。

「胸に手を当てる。」

改革の愚かしい憤怒は、荷物の鎖に過ぎないものを

完全に断ち切ることはできませんが、大きさを増し、

私の血をこれ以上なくたぎらせることでしょう。この世紀は

私の理想には成熟していません。私は

やがて来る市民として生きています。

想像図が、あなたの静けさを濁らせてしまいますか? ——

³ 「プロテスタント」とは「抵抗」を意味しているように、それまでの西欧キリスト教で唯一の権威とされていたであったローマ教皇率いるカトリックの教えへの抵抗していた一群の人々をさす。ローマ・カトリックへの方針に懐疑の念を抱いた人物は歴史的にもいろいろ登場したが、王とマルキ・フォン・ボーザの会話は、ルターやカルヴァンが牽引した一六世紀ヨーロッパの宗教抗争に関連している。王は抵抗者たちを抑圧して、カトリックの権威を保つことに腐心している。

あなたの息は、これを吹き消すのです。

王

余が

お前のこの面を知った初めての者か？

マルキ

この面――

そうです！

王 「立ち上がり、何歩か進み、マルキと向かい合って立つ。独白して」

この調子は、少なくとも初めてだ！

お世辞は言い尽くされた。模倣は

てっぺんから人の品位を貶める。――一度

正反対を試してみよう。どうしてだめなものか？

不意をつくことが幸運をもたらすのだ。――

お前がそのように考えるならば、いいだろう、余も

王政への従事をそのように整えるようにしたい――

強い精神に合わせて。――

マルキ

私には、陛下、いかに小さく、いかに低く、

あなたが人間の尊厳について考えているのかと聞こえます。

自由な人間の言葉の中にさえも、

社交辞令の技法が見えてきますし、それに

誰があなたにそうすることを認めたのかもわかったように思います。

あの人たちが、あなたにそれを強いたのです。彼らは

自由意志で自らの高貴さを放棄したのです。

自由意志でこの低い段階へと降りてきたのです。

ぞつとしながら、彼らは

自分たちの内面の偉大さという幽霊から逃げ出てきて、

貧しさの中にいる自分たちが気に入ったのです。

卑怯な知恵で自分たちの鎖を飾り立て、

それをお行儀よく身に付けることを徳と呼んだのです。

このようにしてあなたは世界を受け継ぎました。このようにしてあなたは立派なお父上から伝承されたのです。

どうやって、あなたはこの悲しい

歪みの中で――人間を敬えるというのでしょうか？

王

いくらか真実なことが

この言葉にはあるな。

マルキ

しかし残念です！

あなたは人間を創造主の手から受け取り、

自らの手で作品に変えてしまったというのに、

そしてこの新たに命を注がれた被造物が

神に身を委ねたというのに――そこであなたが果たしたことは、

何と言うか、あなた自身はまだ人間のままです――

創造主の手から生まれた人間。あなたは

死すべき定めのある者として悩み、行動し続けたのです。

あなたには共感が必要です――そして人は一人の神に対してのみ生贄を捧げることができるのです

――震え――祈ることができるのです！

骨折りがいのある取引です！不幸せに

自然を歪曲したものです！――あなたは人間というものを

あなたの弦楽器に貶めたので、
誰があなたと旋律を分かち合うのでしょうか？

王

彼は私の魂の中へつかみ込んでくる！

(おお神よ、

マルキ

しかしあなたにとって

この犠牲には何の意味もありません。あるもののために
あなたはまた卓越しています——あなた自身の種族——

これがために、あなたは神なのです。——そして恐ろしいことに
もしそうではないとしたらば——もしこの高値のために、
何百万もの人々の砕け散った幸福のために、

あなたが何も得ることができないとしたら！——もしあなたが
処刑した自由が、あなたの願望を成熟させることのできる

唯一のものかもしれないとしたら？——お願いですから、
私を解放してください、陛下。私にとって重要なことが、
私をあちらへと駆り立てます。私の心は溢れています——

唯一の方の前にいるという魅力はあまりにも強いものです。

「レルマ伯爵が入ってきて、静かに数語、王と話す。王はレルマに
退がるように合図し、先ほどと同じところに座ったままでいる。」

王 「レルマが退場した後に、マルキに向かつて、」

すっかり話してしまいなさい！

マルキ 「しばらく沈黙した後には、」

私は感じてます、陛下——価値の全体を——

王

お前は余に、まだ言うことがあったぞ。

言ってしまうのだ！

マルキ

陛下！

最近私はフランドルとブラバントから帰って来ました。——
とてもたくさん、栄えた諸州です！

力強く偉大な民衆であり——そしてまた

善良な民衆です——この民の父上！

これは思いますに、これは神が関わることのはずです！

あちらで私は焼かれた人間の四肢に行きあたりました——

「ここで彼は静かに口をつぐむ。彼の目はじつと王に注がれ、王は
この視線に応えようとするが、しかしためらい、戸惑って地面を
見つめる。」

あなたの言う通りです。あなたにはしなければならないことがあ
ります。

あなたはご自分がしなくてはならないと思われたことを
できると言うことが、私を

すっかり驚きで身震いさせます。

とても残念なことです、犠牲者の血の中には流れていたのに、

犠牲が犠牲者の精神に賛歌をささげることには

ほとんど役立たなかったなんて！

ただの人間が——より高次の存在などではなく——

世界史を書いているのです！——柔和なほうの

世紀は、フィリップ様の時代には抑圧されるのです。

この時代は、一層穏やかな英知をもたらしました。市民の幸せは
王侯の偉大さと融和して、のろろ歩みを進めることになります。

侯約家の国家は、自分の子どもたちを惜しみ、

要求は人間的なものになっていくのです。

王 お前は、いつこの人間的な

世紀とやらが現れると考えているのか。余は

今の時代の呪いに怯えるべきだったとでも？ 我がスペインで

お前の周りを見てみる。ここでは

市民たちの幸福は、決して曇ることのない平和の中で栄えている。

そしてこの静けさを、余はフランドルの民に与えるのだ。

マルキ 「早口で」

墓地の静けさですよ！ あなたは

手を付けたことを、終わらせようとお望みなのですね？

全キリスト教徒に成熟した変化を、

つまり全ヨーロッパを若返らせる月並みな春を押しとどめようと

お望みなのですね？ あなたは

まさにヨーロッパにおいてたった一人——全速力で回転して

引き留めることがほほできない、世界の諸関係という車輪に

身投げをしたいのですか？

人間の腕で、その進行を阻もうとでも？

あなたはそうなさらないでしょう！すでに何千人もが

あなたの国々から、喜んで、貧しくとも、逃げ出しています。

信仰のためにあなたが失った市民は、

あなたの最も高貴な者たちだったのです。母のごとき腕で

エリザベート様は逃亡者たちを受け入れています。

そして恐ろしいことに、我が国の技術によって

イギリスが栄えています。もし新しいキリスト教徒たちが

勤勉さから逃れてしまうならば、グラナダは荒れてしまいます。

そして歓声を上げて、ヨーロッパは自らの敵が

自らのせいで負った傷で出血死するのを目にするのです。

「王は身じろぎする。マルキはそれに気が付き、数歩近寄る。」

あなたは永遠のために植え付けようとして

死の種を撒くのですか？ そのように無理強いされた活動は

創造主の精神を永続させません。

忘恩のために、あなたは栽培をしたのです——徒に^{いふから}

自然と厳しい戦いをし、

王侯の偉大な生命を

叶わなかった構想の犠牲にしたのです。

人間というものは、あなたが人間から支えられている以上のもの

です。

長いまどろみの結びつきを人間は破ることになるでしょう、

そして再び、自らの神聖なる権利を要求することでしょう。

ネロやギリシャの王プシリスのような者たちと

あなたの御名を彼らは並べることでしよう——私にも嘆かわしい

です。

というのも、あなたは善良だったからです。

王 誰がお前に、このことをそんな風に

教えたのか。

マルキ 「燃えるように」

⁴ イギリスのエリザベス一世をさす。

それは、全知なる神様です！

そうです——そうです——繰り返しましょう。私たちからお取రిになったものを、また返してください。

強き者のように、寛大に、人類の幸福を

あなたの豊饒さから流れ出させてください——人々の心を

世界を覆うあなたの建造物の中で熟成させるのです。あなたが

私たちから取り上げたものを、お返し下さい。

幾万もの王の中で、王におなりください。

「彼は大胆にも王に近寄る。その時、彼は王にしつかりと燃えるような視線を向けたままでいる。」

ああ、この偉大なる時に加わっている何千人もの雄弁さが

私の唇に漂っていてくれたなら、

私がこの目で認めた輝きを

炎に高めるほどに！——

不自然に崇拜することを

やめておしまいなさい、

それは私たちを滅ぼしてしまいます。

私たちの、永遠と真実のお手本におなり下さい。決して——決して——

限りある命の人間が、そんなにも所有してはならなかったでしょうに、

そんなにも神々しく使うべきものを。

ヨーロッパのすべての王がスペイン王の名に忠誠を誓っています。

あらゆるヨーロッパの王たちの先頭をお行きください、

その手でさっとお書きになり、そして新たに

大地を創造してください。

——思想の自由を、お与えください！

「足元に踞る。」

王 「驚いて顔を背け、それから再びマルキに目を止める。」

ずいぶん奇妙な陶酔者だな！

とは言え——立ちなさい——余は——

マルキ

この素晴らしい自然を

見回して下さい！ 自由の上に

自然は築かれているのであり——そしてこれは自由によって

なんと豊かなのでしょうか！ 偉大な創造主である方は、

たった一滴の露に青虫を投げ入れられて、そして

腐敗という死の領域においてもなお、

恣意に任せているのです——あなたの創造は

なんと狭く貧相なのでしょうか！ 葉がざわざわなるだけで

全キリスト教徒の主人はびくびくしています——あなたは

あらゆる徳をおそれなくてはなりません。あの方は——自由の

うっとりするような現象を邪魔せずにいて——

邪悪というぞつとする軍隊を

自らの宇宙の中でむしろ暴れさせるのです——あの方が

芸術家だと気づく人はいないでしょう、慎重深く

あの方は永遠の法則の中に身を隠しているのですから。

この法則に、自由精神は注目しているのです。

芸術家を見ているわけではありません。

何のための神か、とあの方は言っています。世界は自らで十分なのです。

キリスト教への信仰は、あの方を

この自由精神の洗神以上に賞賛したりはしていません。

王 だからお前は、この

崇高なる模範を、この世で、

余の国家において模倣しようとしているのか？

マルキ

あなたなら、

あなたならおできになります。他の誰ができますか？

もしあなたが、民の幸せに自治の権限を委ねて下されば、

その力を——ああ——王位の偉大さが続く限り

——あなたは人間性に対して

失われていた高貴さを再び作り出すことになるのです。市民たちは、

再び、かつてそうあったのと同じでなければなりません。

王冠の目的とは——目的には義務が伴わなければなりません、

兄弟たちと同じように、尊い権利なのです。

もし人間だけが、自分自身に返り、

自分の価値の感情に目覚め——自由の高貴さ、

誇り高い徳が栄えたなら——

そうすれば、陛下、もしあなたが世界で一番の幸せな国へと

あなた自身の王国をすることができれば——そうすれば

あなたの義務は、世界を征服することになりましょう。

王 「しばらくずっと黙り込んでから、」

最後まで話さない——余にはよくわかる、

他の人間の頭の中とは違って、

この頭の中に世界が描き出されている——他人の

基準にお前を従わせたくない。

余は、お前の心の最も深いところにあるものを

満たす最初の者である。余は、それができるとわかっている。

このためらいゆえに、そのような意見は、

そのような激しさを備えているとしても、沈黙しなくては

ならないのだ——この

確固たる賢明さのせいで、なお若いのに、

余は忘れることにしたい、これらを聞いたことを、

そしてどうやって余がこれらを耳にしたかを。立ちなさい。

余は、ことを急ぐ若者を、

年長者として、王としてではなく、諫めることにしよう。

余がそう望むから、そうするまで——毒そのものは、

その善良な性質においては、

より良いものと、自らを高めることができるのだから——

しかし我が異端裁判所からは離れていなさい。——

残念なことになるかもしれない——

マルキ

本当ですか？ そうかもしれないと？

王 「彼に見惚れて」

余は

こんな人間を見たことがなかった。——断じて！

ないぞ、マルキ！ お前は余に対して多くをなすすぎた。余は

ネロにはなりたくない。そうなりたくない——
お前に対してそうなりたくない。すべての
幸せを、余の下で干からびさせてなるものか。
お前自身は、お前は余の目の前で、
引き続き人間であつてもよい。

マルキ 「早急に」

そして

私の仲間たちはどうです、陛下？——ああ！ 自分の用件を
することができなかった、自分のことをしたかったのではない。
それで、あなたの家臣たちは、陛下？——

王

もし

これから来る未来が余をどう裁くかを、
お前がよくわかっているのなら、その時はお前から学ばよい、
余が一人の人間を見つけたとき、
その人間をどのように扱ったかを。

マルキ

ああ！ 王たちのうちの

最も公明正大な方が、一度たりとも
最も不公平な方にならないください——あなたのフランドルに
は

私より良い人間が何千人もいます。あなただけが——

遠慮なく言わせていただくなれば、偉大な王様でしょうか？——
あなたは、今、この穏やかなイメージの下に

おそらく初めて、自由というものをご覧になっています。

王 「穏やかな厳かさを込めて」

もう

この話はやめにしよう、なあお前。——余はわかっている、

お前は考えを変えるだろうと、まず
人間を知りなさい、余のように——しかし、余はお前を
これきりにはしたくないものだ。お前をつなぎとめるには
どうやって手を付けてよいのやら。

マルキ

私を

ご放念ください。私はあなたにとってどうだというのでしょうか、
陛下、

もしあなたが私に取り入ったとして？

王

この誇りに

余は耐えられない。お前は今日から

余に仕えるのだ——抗弁はするな。

余がそれを望むのだ。

「間をおいて。」——しかしどうやって？ 余は一体何を

しようとしているのか？ 余が望むことが正しいものではなかつた
か？

そしてここに、それよりいくらか多くのことがある——お前は

余の玉座の上に、余を見つけ出したのだ、マルキよ。

余の家族の中でも、見つけたわけではないな？

「そこでマルキは、考え込んでいる様子である。」

わかるぞ。

しかし——もし余がすべての父親たちのうちで

最も不幸な父親だとしても、余は幸せにはなれないのか、

夫として？

マルキ もし希望に満ちた息子というものが、

もしきわめて愛おしい妻を所有することが、

一人の人間に、この名を与える権利があるとすれば、あなたは
この両方によって、もつとも幸福な人です。

王 「暗い表情をして、」 いいや！ 余はそうではない！

余がそうではないことを、余は今ほど
深く感じていたことはなかった――

「悲哀の視線でマルキを見つめながら。」

マルキ 皇子様は、高貴で善良にお考えになっています。

私はあの方を、そうとしか思ったことはありません。

王 しかし余は、そう思ってきた――あいつか余から奪ったものは、
王冠で埋め合わせすることもできない――

貞潔なる王妃はな！

マルキ 誰が、

そんなことを言うのですか、陛下！

王 世間だ！ 中傷だ！

余自身もそう思う！――ここに証拠がある。これらは

まったく矛盾することなく王妃を弾劾している。ほかにも

もつとある。最悪のことを

感じさせるようなものが――しかしマルキよ――難しいのだ、

難しく思えてならない、たった一つのことを信じるということが。

誰が妃を訴えているのか？――もし妃が――そんなにも

不名誉になることをやってのけられたのならば、

ああ、エボリのような者が誹謗することを、

余が信じるほうが、よほど許されるのではないか？

あの僧侶は、我が息子や妃を嫌っているのではないか？

アルバが復讐をする、わからないのではないか？

妻は、あいつらみんなよりも、ずっと大切なのだ。

マルキ 陛下、

何かが、女性の魂にはなおも生きているのです、

それは、どんな目に見えるものにまして崇高なもので、

すべての中傷にも勝ります――それは

女性の貞潔というものです。

王 そうだ！ 余もそう言いたかった。

こんなにも、王妃を引きずりおろして懲らしめるのは、

対価が大きすぎる。こんなにも、

まわりが余を説き伏せようとしても、

結婚の神聖な絆は、引き割れない。お前は

人間を知っている、マルキ。そんな男が

ずいぶん前から余は欲しかった、お前は善良で快活だ、

それでいて人間も知っている――だから余は

お前を選んだ――

マルキ 「驚き、びくりとして、」

私をですか、陛下？

王 お前は

主人の前にいる、そして自分自身の

利益は願うな――まったく。これは新しいことだ――お前は

びつたりだろう。情熱がお前の見るものを

惑わせることがない――我が息子のところへ駆けていき、

王妃の心を探れ。余は

妃と内密に話をするという全権を、お前に与えよう。

さあ、下がってよい！

「王はベルを鳴らす。」

マルキ 私の希望どおりのことでは

ないでしょうか？——だとすれば本日は

我が人生最良の日です。

王 「接吻のために手を差し出す。」

お前が家臣たちの中で

負けてはならない。

「マルキは立ち上がり、退場する。レルマ伯爵が登場する。」

この騎士は、

今後案内なしで通してよい。

第三幕終わり 第四幕に続く